



キリストの聖体(ヨハネ 6:51-58)

イエスの小さくなられた姿がわたしを養う

キリストの聖体の祭日を迎えました。わたしたちが聖体を拝領する中で、神が御子を通して示そうとしている思いを学ぶ機会としましょう。キリストの聖体は心と体を養う糧です。心と体を神の思いに向けるヒントを得たいと思います。

父の日を迎えました。中田神父さまにとってお父さんや、おじいちゃんは、早くに亡くなってしまった人たちです。わたしのお父さんのお父さんは、わたしが3歳のころには亡くなっていました。わたしのお母さんのお父さんも、人間の死が理解できるようになってから最初に亡くなった家族です。いつも、先に亡くなりました。

だから中田神父さまは考えたのです。父方のおじいちゃん、母方のおじいちゃんは、生きているあいだの時間よりも、亡くなってから思い出す時間のほうが長い人たちでした。父方のおじいちゃんのことを、お父さんや洗礼の代父のおじさん、おじいちゃんより長生きしたおばあちゃんたちから聞きました。母方のおじいちゃんも同じでした。

中田神父さまの中で、思い出をつないで、両方のおじいちゃんの姿がよみがえりました。どんなことを大切にしていたのか、どんなことをしてはいけないと考えていたのか。今神父さまの心の中にあるおじいちゃんの姿は、亡くなってから、長い時間かけて形になったものです。

弟子たちにとって、イエスさまの姿も同じではないでしょうか。イエスさまと弟子たちと共に生活したのは3年間です。それより、復活して天に昇られ、聖霊が注がれてからの時間でイエスさまの教えが深まって、イエスさまの姿をはっきりと描けるようになったのです。

ここで意外なことを話しますが、イエスさまの出来事が書かれた福音書は、いちばん早く書かれたマルコ福音書でも70年代、イエスさまと3年間を過ごしてから40年も後に書かれています。最後に書かれたヨハネ福音書は、実に50年以上もあとに書かれています。イエスさまの姿をより詳しく描くために、40年、50年という長い時間も必要な時間だったのでしょうか。

福音朗読に移りましょう。イエスさまは何度も、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む」(6・54)ことを繰り返して言います。イエスさまを食べると言うのですから、イエスさまはバラバラにちぎられて、形がなくなってしまうことになります。まるで、親鳥が雛に餌となる動物を与えて、雛が食べるような光景です。餌として与えられた動物を食べているあいだ、雛たちは口の周りは血がいっぱい付いているはずですが。

本当に、イエスさまが食べ物になることが父なる神さまの人間に対する思いなのでしょう。イエスさまが肉と血になってしまうよりも、何か代替りの食べ物を与えて、イエスさまはそのまま活動を続けるほうが、神さまの計画が前に進むのではないのでしょうか。いえ、父なる神さまは、イエスさまが肉と血になって食べられることを望まれたのです。

「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。」(6・53)今は、わたしたちにとってイエスさまの肉と血とはご聖体のことです。どうしてほかの食べ物ではなくて、ご聖体をいただかなければ、命はないのでしょうか。あんなに小さなパン、あんなに薄いパンのどこに、命を養う力があるのでしょうか。

中田神父さまは今 51 歳です。初聖体を受けたのは 6 歳の時です。45 年間、ご聖体をいただいています。でも一度もおなか一杯になったことはありません。朝 6 時のミサでご聖体拝領してミサが終わってすぐ考えることは、「あー腹減った。何を食べようかな」です。それなのにどうして、「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」(6・51)のでしょうか。

神父さまになってから 25 年、神父さまになる前よりもご聖体のことを思い巡らし、学んできました。それでも時々、ご聖体が命を養ってくれることを忘れてしまうことがあります。昨日も、病院に入院しているおじいさんにご聖体を運んでお見舞いしてくださいと言われて、「困ったなあ。日曜日の説教の準備中で忙しいけどなあ」と一瞬思ったのです。

けれども、命の危険にあるおじいさんにとって、神父さまが運んできてくれるご聖体はどんなに力強いことでしょうか。神父さまはそのことをもう一度自分に言い聞かせて、病院で待っているおじいさんにご聖体を運んでいきました。

ご聖体は、見た目には小さなパンで、おなか一杯にもならないし、栄養もありません。お金で考えたら 10 円の価値もないかもしれません。けれども、ご聖体を待っていた人は感謝してくれます。その姿を見ると、「わたしたちへの愛のためにご自分を無にされたキリスト」の姿が見える気がするのです。

ご聖体を拝領する人は、その人が命の危険にあればなおさら、ご自分を無にされた神さまの愛をいただいているのだと思います。神父さまはこの前のお見舞いの時、イエスさまはこのおじいさんのためにご自分を無にされたのだなあと思いました。神さまの深い愛をもう一度思い出しました。この姿が、わたしたちを生かす力なのだと思います。

わたしたちへの愛のために、ご自分を無にすることもためらわなかった神さまの愛が、キリストの聖体です。この神さまの愛が、永遠の命です。神父さまは初聖体から 45 年もかかって、司祭になって 25 年もかかって、神さまの愛はわたしたちを生かすのに十分だと分かってきました。忘れることもあるけれども、今ははっきりそう思います。

今日お父さんに感謝するためにごミサをお願いして、ご聖体を拝領する子供たちも、覚えていてほしいと思います。ご自分を無にされた神さまの愛、あの小さなパンにまで小さくなってくれた神さまの愛は、わたしたちに永遠のいのちを与えるのに十分なのです。できれば、小さなパンまで小さくなられたイエスさまにお仕えする司祭、お仕えするシスターになろうと手を挙げてくれる人がいたらなあと思います。